

辞典七〇〇点突破！定評のある東京堂の辞典

### 假名草子集成 第四十三巻

花田富一夫他編 本集成は假名草子のすべてを網羅的に収録し厳密な校訂をもとに翻刻する。第43巻に収録した作品は「住吉相生物語」「醒睡笑」。定価一八三七五円

### 迷解 国語笑辞典

郡司利男著 「悪魔の辞典」の訳者であり、言語学の泰斗である著者がことばを手足にとり、粋な日本語の世界を鋭い言語感覚で解説した「笑」辞典。定価一八九〇円

### ROM版 くずし字解読用例辞典

山田奨治・柴山 守編 ロングセラーのくずし字解読辞典と用例辞典の検索方法を同時に使える画期的な辞書ソフト完成◆詳細内容見本進呈◆価格二九四〇〇円

### 日本語・日本文学の研究に必携！ ROM版 鎌倉遺文 古文書編 全四十六巻

竹内理三・東京大学史料編纂所編  
あらゆる分野において実証的な中世史の研究には必須の根本史料である鎌倉遺文の古文書約三五〇〇〇余通を収録。平安・鎌倉時代文学の研究に有益な史料として提供する典籍でもある。また日本語学では文体・語彙の差異などの解明にも期待されている。検索は、キーワード・年・文書から選択・組み合わせができる。キーワード検索は地名・人名を入力すればすべての文書から検索が可能。詳細内容見本進呈 価格九四五〇〇円

(価格は税込)

東京堂出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-17  
電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746  
http://www.tokyodoshuppan.com

### 日本書紀「歌」

全注釈 A5型 1260円

大久間喜一郎・居駒永幸福  
二八首の歌と前後の散文が織りなす、古代史書の表現世界を捉える。

### 恋の万葉集

論集II B5型 2940円

高岡市万葉歴史館編  
人麻呂・家持・坂上郎女たちの相聞歌や歌の表現、歌垣などを考察。

### 稲賀敬二 コレクション

全六巻完結！ 華書54075円

単行本未収載の一七〇編を、第二線で活躍中の研究者による解説を付して、ジャンル別六冊に収録。豊饒にして刺激に満ちた稲賀ワールドを堪能できるシリーズ。秋山慶 / 伊井春樹 / 梅原猛各氏推薦

① 物語流通機構論の構想 A5型 8400円

② 前期物語の成立と変貌 A5型 6835円

③ 『源氏物語』とその享受資料 A5型 9450円

④ 後期物語への多彩な視点 A5型 8400円

⑤ 王朝歌人としての作品世界 A5型 9450円

⑥ 日記文学と『枕草子』の探究 A5型 11650円

### 笹間文庫 原文&現代語訳シリーズ 枕草子「能因本」

松尾聰・永井和子訳・注 B5型 2625円

「枕草子」の言葉は鮮烈なイメージを放つ。 B5型 2625円

### 伊勢物語

永井和子訳・注 B5型 1029円

愛の充足を知らず、永遠にさまよう男の物語。 B5型 1029円

### 中世和歌テキスト論

定家へのまなざし A5型 14700円

川平ひとし A5型 14700円  
中世和歌の世界―その広がり―と深度をどう測り、どう把握できるか。芸術行為の本質解明を目指す、稀代の文学研究者の膨大な遺稿群。重版出来！ A5型 18900円

### 日本文学 色彩用語集成

伊原昭 A5型 9975円

二世編 新装版 A5型 9975円  
二〇〇余もの古典作品に描かれた色に関わる原文を全て採録した労作。

読本「よみほん」事典  
江戸の伝奇小説  
国文学研究資料館・八戸市立図書館編 B5型 2940円  
読本の形成から展開まで、江戸後期の長編娯楽小説の全貌を紹介。

笠間書院

〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-2-3 電話03-3295-1331  
http://www.kasamashoin.jp/ ファクス03-3294-0996 (価格は税込)

ISSN 0452-3016  
雑誌 03787-6



4910037870681  
01524

Printed in Japan

## 国文学 6 特集 落語を愉しむ

特集

# 落語を愉しむ

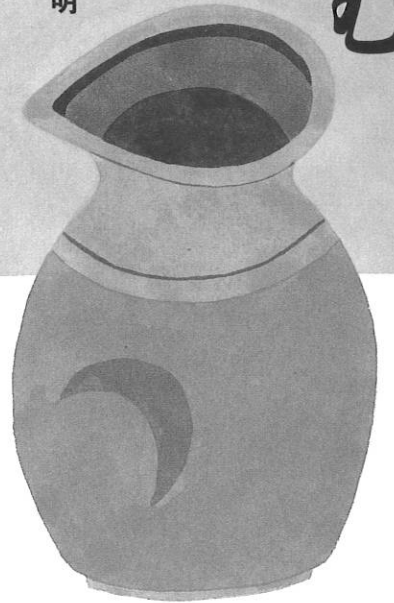
◆立川談四楼 落語国の人々

◆長島平洋 「東京落語」と「上方落語」の ややこしい関係

◆大島希巳江 塩谷透 神崎宣武

◆桂文我 水川隆夫 菊池真一 平岡正明

新連載 難訳日英辞典 松本道弘



# 国文学

日本語・日本文学・日本文化

二〇〇八年 第五三巻八号

解釈と教材の研究



学燈社

第五三巻八号 二〇〇八年六月号

国文学 解釈と教材の研究

平成二十年六月十日発行(毎月一回十日発行)第五三巻第八号六月号  
昭和三十一年九月二十五日 第三種郵便物認可 (通巻七六八号)

定価一六〇〇円 本体一五二四円

# 心意伝承 — 遊働世界に生きる —

ほんじょうまさかず  
本莊雅一

## 第九回 夢の在りかを見めて — 境界認識の原像 — ⑤ 究極の風景との邂逅

### 夢は現実生活の根拠

託宣や夢によって聖地が発見されるという伝承から、心意伝承としての境界認識の原態を探ってきた。夢による聖域発見の意識は、逆に聖域から夢を与えられるという形式をも生み出す。それもこれも元来は、ある自然景觀との接触が、現実風景の認識以上に、何かこの世ならぬ、現実を圧倒するようなイメージの発想と共にあったことを意味していたのであった。託宣や夢は、その圧倒的現実の具象例に過ぎない。

しかしそういった非現実的な、なんの役にも立たないものこそが、現実生活に何か決定的な根拠を与えるものと感じ取るのが、日本人の生活の知恵でもあった。

奥深い山や川の、変化に富んだ風景に神秘の世界を感じ取り、その神聖の象徴たちの構コンステレーション成を、私達は見い

るが、日本人はこれを、意識的あるいは無意識的に、神の意思・宇宙の意思によるというふうには、どこかで感じ取っているのである。

信仰とは無縁に見える現代日本人ですら、不本意な転勤に断固抗議・拒否することはせず、「これも自分のキヤリアに必要なことなんだ」と諦めて任地へ向かう。あるいは「この会社は自分の居るべき所ではなかった」と判断して退職する。いずれにせよ、自分の主体的意思を相手に納得させる主張や議論はしない。自分と上司や経営者の、さらに上位に、何か超越したモノのはたらきがあつて、そうした超越者に対抗するのは無意味、という感性に従っているのである。

その超越者を、神とか仏とかことさらに名づけもせず、漠然と大なるものの働きとして、その支配を受け取る。極めて敬虔けいけんで信仰心のあつた人々でありながら、神とか信仰などには、今や世界一冷淡で無関心であるという、非常に特異な民族とも言える。

自分たちの心性について無自覚のままでは、せっかくの人生も本当には楽しくないのではないか。

だからなおのこと、日常の平凡な一齣ひとしほにひそむ、生々しいような生命の輝きを見つきたい。どのような心意伝承が機能しているかを知れば、遙かな時の彼方までもが

だしてきた。そして、人々が邂逅であいつた心揺さぶられる世界を、人間が関わりを持つ一つのまとまった世界、すなわち境界領域として整える方法を探り、四至境界を典型的なものとして見てきたのである。こうしてイメージの輪郭を整えた世界から、人々は住まいする活力を得た。

しかし、「終ついの棲家すまいか」という言葉が示すように、いったん落ち着いたと思えたところが必ずしも究極の生活世界ではなく、移住をくり返しながら自分の最終の地を探し求める人生を送る人も多い。それは様々な要因による。戦乱・天変地異などの事件によって、永住するはずの地を追われた。権力者によって国替えをされた。豊かな土地・資源などを求める放浪。修行の場や浄土を求めての行脚あんぎや。田舎の暮らしに飽きて都会へ出る人もいれば、都会に嫌気がさして地方へ向かう人もいる。遠征・転勤・出張・派遣その他もろもろの事由で人々は移住す

今現在の日常に、身边に、自分自身と一つに生きている、という奥行きが感じられる。それだけでも、豊かな生活が実現できるはずである。

### 高天原の風景を探せ

私達が生きる究極の場というものは、どうやって獲得できるのか。ある種のメリットがあれば、別のデメリットも見つかつて、完璧な場というものはあり得ない。しかしそれは人間の都合をあげつらうからで、どんな大金持ちでも、二人以上いれば利害得失の衝突は起きて、必ずしも至上究極の場など得られはしない。

しかし、かつての日本人は、現実判断を超越した確信の仕方・規準獲得の仕方を持っていた。それが夢であり、託宣であつた。

現実判断には功罪両面が際限なくつきまとうが、夢告や神託ならば、そうした対立は超越する。だが、特にどのような夢なり託宣なりが、究極世界の確信となつたのか。

日本最高の聖地のひとつ、伊勢神宮の鎮座に関する伝承が、その解答を示しているのである。天照大神あまてらすおほみかみを祭る本拠だから最高の聖地、のではなく、「究極の鎮座

地を見つけた」という伝承のイメージが、最高だったのではないかと、私には思える。

崇神天皇紀六年条から、天照大神の、長い旅が始まる。それまでは、「天皇の大殿の内に並祭」されていたが、崇神天皇の代になって、ようやく「其の神の勢を畏りて、共に住みたまふに安からず」思われるようになった。最初は天照大神を豊鍬入姫命に託して、鎮座地を探させた。ところがどうしてもうまくゆかない。垂仁天皇紀二十五年条に至って、今度は姪の倭姫命に託し、二十六年条において、天照大神から、「ここだ」という夢のお告げをもらい、鎮座したところが、伊勢の五十鈴川のほとり、という話である。

これを主題化したのが、『倭姫命世記』である。皇太神宮の鎮座伝記を集めた神道五部書の内の一つで、度会行忠が、鎌倉中期文永七〇弘安八（一二七〇〜八十五）年頃に撰したものとされている。これによれば、崇神天皇の五十八年に、倭姫命は天照大神の御杖代となる。そして次のような夢を見る（岩波日本思想大系『世神道論』より）。

六十年癸未、大和国の宇多秋宮に遷りたまひ、四箇年の間を積て齋き奉る。時に倭の国造、采女香

### 猶天上に在る儀のごとし

それにしても途方に暮れるほど長い移住の旅である。大和の三輪山で豊鍬入姫命から引き継いで最初の遷宮地大和国の宇多秋宮を皮切りに、伊賀の国三ヶ所、近江の国二ヶ所、美濃の国二ヶ所、伊勢の国五ヶ所、合計十三ヶ所、宮を遷す。それぞれの宮処で二〜四年ずつ奉齋してきたというのである。

ほぼ三十年におよぶことになる倭姫命の旅だが、シヨートカットして、その終着に注目しよう。

（垂仁天皇）二十六年丁巳冬十月甲子、天照太神を度遇ノ五十鈴河上ニ遷し奉ル。（中略）尔の時に皇太神、倭姫命の御夢に諭シ給はく、「我レ高天原に坐シ、懸戸押し張りて、原如見見志真伎志国ノ宮処は、是ノ処ニアル也。鎮理定理給エ」と覚へ給ヒキ。（中略）時に送りの駅使、朝廷ニ還り詣り上り、倭姫命の御夢の状を細ニ返事白しき。尔の時天皇聞し食して、即ち大鹿嶋命を祭官ニ定メ給ひき。（中略）即ち八尋の機屋ヲ建テ、天棚機姫神ノ孫八千姫命ヲシテ大神ノ御衣ヲ織ラシム。譬ヘバ猶天上に在ル儀ノごとシ。

刀比売と地口御田とを進る。倭姫命の御夢に、「高天の原に坐シテ吾が見し国に、吾を坐エ奉レ」と悟シ教へ給ヒキ。

高天原で見たという風景・イメージを、この国土において探せというのである。これも「原風景」というものの具体的な表現の仕方であろう。こう言われれば、ある意味でもう迷子にはなり得ない。誰も高天原など行ってきたこともないのだが、とりあえずどこへどう行こうと、高天原という「いつか来た道、いつか来た丘、雲」に出くわすのを待つておればよいという論理が、突然成立してしまうからだ。

ただし、このような先験的・原風景的なイメージが、具体的に実在し、私達の心身に内在するかどうかはわからない。データを記憶するメディアのようなものを前提にすることはできない。ただ、そのようなものが「あるはずだ」と信じて、行動を方向付けてしまうと、具体的な世界定めの趣向が現れてくるのではないかと思ふのである。

伊勢の国度会の地、五十鈴川のほとりに天照大神を遷座させたところ、夢告がでた。「高天原で昔見た宮処はここです。ここに鎮座します」。早速使いを立てて、天皇に夢のお告げの様子を詳しく報告させた。天皇も即座に動き、神主以下の神職達を選定、派遣し、もろもろの社殿、宿泊施設等而建てさせ、天棚機姫神の霊格を受け継いだ織女を派遣し、皇太神霊の衣を織らせた。たとえていうなら、やはり天上世界における装いのことである。

この伝承の愉快なところは、倭姫命の夢の報告がすべてだという点である。地形、地勢、植生、気象、産物、資源、人的勢力、などといったものではなく、どんな夢を見たかの報告で、天皇も皇太神宮鎮座地として認定してしまった、と伝えているのである。今日の常識では考えられないことではないか。それほどまでに、国の最高権威者が認めた夢とは、なんのことはない、「昔見た国だよ」という夢なのである。そうしてさまざまに大宮処としての環境整備をしたところ、「思った通り天上世界と同じようなありさまになった」とまで断定してしまう。

普通に考えれば、伊勢の「度遇ノ五十鈴河上」などは初めての場所であるし、天上の生活など誰も経験していない。しかし、そこで「原如見」とか、「猶天上に在ル儀ノごとシ」と確信してしまうこと自体が、然るべき



究極の場所の証明、ということになってきているのである。特に、夢によって評価されたのだから間違いない、そんな認識の仕方が、この伝承から読みとれるのである。

「原如見」とは、先に宇多秋宮で見た夢の「高天の原に坐シテ吾が見し」に対応するものには違いなからうが、「高天原」世界という具体的な限定を超えて、「むかしみた」と、地名不明の原風景感覚にとらわれた、ということが大事なわけではなかったか。初体験でありながら「やっぱりだ」と得心してしまう体感がすべてではなかったか。

「やっぱりだ」の発想は、形を取ろうとして取り得なかったところに、満足のいくイメージが与えられたことを意味しており、それがあたかも既知のものであったという感覚を催すほど、ピタリしていることであろう。現実的には初めて開かれた世界でも、新たに構築された環境であっても、心意心象の上では、根源世界に帰還したという確信を得たい。そこで見出された「夢のおしえ(教・辞)」が「原如見」であった。

## 「昔見し」という未来

「むかしみた」とは一見平凡な言葉である。しかし、

わが盛また変若めやもほとほとに寧楽の京を見ずか  
なりなむ (万葉集巻第三、三三二)

わが命も常にあらぬか昔見し象の小河を行きて見む  
ため (三三三)

浅茅原つばらつばらにも思へば故りにし郷し思ほ  
ゆるかも (三三三)

わすれ草わが紐に付く香具山の故りにし里を忘れむ  
がため (三三四)

わが行きは久にはあらじ夢のわだ瀬にはならずて淵  
にあらぬかも (三三五)

「私の盛んな時期に若返ることはないだろうから、奈良の都を見ずに終わるのだろうなあ(三三二)」「私の命が永遠であればよ、昔見た象の小川に行ってみるため(三三三)」「しきりに思い詰めていると、残るくまなく生い茂る茅の原と、故郷の風景とが重なることだ(三三三)」「忘れ草を自分の紐に付ける、香具山の麓の故郷を忘れるため(三三四)」「私の旅は長くはないだろう。吉野の夢のわだよ、浅瀬にはならず、淵のまままでいてほしい(三三五)」といった内容か。

気が付くのは、都の華やかな情景を偲んでいるというよりも、むしろ人の姿さえ見えない、大地の形象ばかり

思えば私達自身が幼少の頃から、「今は昔」、つまり「今イコール昔」という時空転換の呪術をかけられつつ、イメージ教育を受けてきていたことに、思い当たるのである。老人の役目は、子どもに「昔を見せる」ことだったのだ。

こうした「夢の辞」が、いわゆる「夢日記」と違うのは、やはり神託的な靈兆に重きをおいていることであろう。シンボル解釈や精神分析などはしない。神のいます幽冥界との往来が成り立ったと知ればよい。そこから送られる信号との交感によって、世界定め(境界領域の獲得)をするという、そういう心理的手続きが、暮らしを立てる場所を知るための優先条件をなしていることは、もはや否めないことである。人々によって求められるのは、究極のところ、原初の世界に立ち返った、という感覚なのである。

『倭姫命世記』は中世の成立で、実はこれも古代から受け継がれた心意伝承であったことが、さまざまな詩歌から伺われる。

たとえば万葉期の歌人大伴旅人が、太宰府の長官として、任地から奈良の都を偲んで詠んだ五首に注目してみよう。

を詠んでいることである。二首目の「象の小河」、五首目の「夢のわだ」など、吉野にある実在の地にことよせてはいるが、やはり心象・夢の風景に惹かれる偏向を示しているとは言えまいか。しかも、ことさらに「昔見し」というのである。

倭姫命の夢告の場合、昔見たという唱えは、決して過去の経験の意味しているのではなく、魂の根源世界に至ることを期する、呪言のような働きを託されていた。

今の場合は、確かに望郷の歌であるし、実際過去に住んだ土地を指し示しているには違いない。しかし、この五首の内、三三一〜三三四の四首までは、もはや古い先長くない身を振り返って、実際の故郷への帰還は絶望的という趣旨であるのに、三三五だけが突然、もうすぐ故郷の「夢のわだ」に着くということになっている。どの注釈書を見ても、この矛盾については何も言わない。

仮に作歌の時期に隔たりがあつて、事情が変わつたのだとしても、ここではあくまでも連作に見えるように編集されているのであるから、やはり連作として、つまりすべて同一のテーマに乗った歌として読むことを、読者は要求されているはずである。これをどう考えるべきだろうか。

要するに、ここでの「夢のわだ」は、文字通り夢の世

界の風景、この世ならぬ浄土として読むよう、編集されているのではないか。旅人本人の意思はともかく万葉編者の意図として、である。とすると、「象の小河」、「浅茅原」、「香具山」、そして「夢のわだ」は、過去の思い出の風景と言うよりも、これから魂が訪れる未知未来の世界を、故郷の写しとしてコンステレートされていることにならないだろうか。無数の星々の中から恣意的に選ばれた星を結んで星座となすように、万葉編者は、無数の風景から「昔見し」の語に導かれた景物を組み合わせて、人生という旅の果てるところを具体的に見立てたのではなかったか。

究極の未来に見るのは、根源的、始原的とも言うべき風景、という直観である。

その意味で、この「昔見し」という辞は、時間的な過去を表すのではない。あたかも時間的に遠く隔たった過去であるかのような表現で、永い間の風雪に耐えるほど記憶に強く刻まれている景物、と見せかける。だが本当の働きは、時間の流れを越えた根源世界に意識を向かわせる呪言なのであろう。あるいは、この辞に引き出された風景を、根源世界として知らしめる生命指標と言ってもよからう。

このように、現実的な論理関係を越えたところにある

かし見しかな

〔信濃の国更級の里、姨捨山の麓に旅寝して、今夜の月は昔見たことだなあ〕

（新勅撰和歌集巻第五 秋歌下、二八二 能因法師）

直観された心象風景は、前の歌に同じである。

姨捨山は、傾斜地に階段状に並んだ棚田に映る「田毎の月」で有名であるが、この歌では実景を愛でるのではなく、原初の記憶に、今ようやく出会ったというふうに感じている。

通常は、月と、その他の景物との取り合わせで歌を詠むが、この二首は今現在の月影と原初の光との重ね絵を詠んでいるのである。ただ瞻西上人は、人の生命について達観した境地から、ある種客観的に悟脱の妙味を教示する態度であるのに対し、能因法師は闇に身を捨て晒して、自ら死者の靈魂となり、その視線から、ヴィジョンを得た。こういうのも、即身成仏とは言えないか。

むかし見しふる野のさはのわすれ水なに今さらにおもひいづらん

〔昔見たふる野の草むらの中に細々とした沢を成して、人知れず流れ行く忘れ水よ、わが想いもあ

感性にして、しかも確かないのちの拠り所となったとき、こうした歌も、単に文芸作品ではない、「夢の辞」の資格を得たと言ってよいものではないだろうか。

魂は月光に惹かれ、恋は忘れ水に果てる

そう思わせる類例を、『新編国歌大観』（角川書店）から列挙しておく。

昔見し月の光をしるべにて今宵や君が西へゆくらん

〔昔見た月の光を道案内として、今夜あなたの魂は西方浄土へ向かって行くのであろうか〕

（新古今和歌集巻第二十 釈教歌、一九七八 瞻西上人）

実景が今宵の月光であると、わざわざことわること、これも通常の時間系列を壊す。

今宵イコール昔。

亡くなった人が見る今宵の月は、実はその人の魂が往く根源的原風景の光であったと、直観しているのであろう。

さらしなやをばすて山にたびねしてこよひの月をむ

の人に知られることなく、忘れ去られて行くことであろうよ

（新後撰和歌集巻第十六 恋歌六、一一七二 寂超法師）

恋歌に分類されているので、それらしく訳してみたのだが、余計なことだったかもしれない。

『和漢三才図絵』に、「澤とは水の集まる所、その水の退くところを藪」とあるが、ちょうど澤から藪へ、あるいは藪から澤へと変化する動態としての忘れ水に、山野草木と水辺との、輪郭があいまいなじみあう、自然の原初の姿を見つけたということ。これ以上に遡って想起すべき風景はない、究極の遊働世界を観照したということなのであろう。

恋歌とは、こうした渾身のイメージ世界を捧げること、想う人に魂乞いをするのであった。

## 月と馬と星の信仰

駒牽の歌とてよませ給うける

むかしみし雲井は遠くへだつれど面かげちかきもち月駒

〔昔見た、皇位という雲上の身分は遠ざかったが、仲秋の望月満月の頃に、信濃の国望月の牧から献上された駒が、その名の通り、天上の満月の光を伴って、私のもとにやってきたよ〕

〔新千載和歌集〕延文四（一三五九）年 巻第四 秋歌上、三九〇 花園院御製

素人のへぼ訳はどうぞ看過あれ。この歌の場合は、単純に過去に経験した至上の位を懐かしんでいるように、まず上の句では見せかけて、下の句でその平凡な風景を打ち消す。すなわち、昼間の雲たなびく蒼空の場面から、夜の満月を背景に天駆けりやってくる龍馬のイメージへと転換するありさまを、詠んでいるのである。

上原輝男は端的に、「馬は天上界の星であった。星が降りてきたのだ」（『かぶき十話』主婦の友社 九七頁）と指摘する。信濃国諸牧、特に望月牧の貢納馬をご覧ずるこの駒牽が、旧暦八月十五日すなわち仲秋の名月の日を中心として行われるというのも、日本人にとって重要なコンステレーションであったに違いない。

あわせて上原は、望月氏の家紋が七曜の紋、つまり七つ星のデザインを信仰していたことに着目していた。また、古代中世史の福田豊彦によると、例えば千葉氏や、

したに等しい、全く絶望的なものであったに違いない。

## 宇宙の思いを写し取る

人智を越えたところからもたらされるイメージとしての夢において、「昔見し」と評価されることは、この意味で、然るべきいのちの在りかを解き明かしてくれる絶対的なものと、信じられたのである。ことさら夢の在りかを覚める心意伝承は、言い換えれば、生命の脈脈を探し当てようとするものである。

注意したいのは、人々が「夢合わせ・夢占い」をしてしまうことの意味だ。説話のたぐいでは、合わせかたの正誤判定はせず、「夢野の鹿」（撰津国風土記逸文、仁徳紀三八年条）のように、予言したとおりの出来事が起きてしまうオチが多い。夢がもたらす教訓的メッセージに従わないと痛い目にあうといった話形である。

しかしこうした話形を産み付ける心意伝承は、たんに倫理教育をしたい目的が根本にあるのではないと思う。夢それ自体が運命を左右する力を持っているというより、あえて人間が浅知恵を働かせてまでも、これから生起する現実を夢を塗りつけることによって、現実風景が光彩を放ち始めるのを期待している、と言うべきであ

その分流の相馬氏なども月星、七曜、九曜などを家紋としており、子孫が居住するところには妙見を祀り、村々に「星の宮」を建てるものであるらしい。「妙見は北斗七星とも北極星ともいわれ、我が国では信濃から関東・東北にかけての牧場地帯に多い信仰で、『七』を聖数とし、将門伝説とは関係が深い」（『平将門の乱』一九八一年 岩波新書 二〇一頁）と述べる。この信仰は、江戸後期の劍豪千葉周作の北辰一刀流にまで受け継がれる。北辰とは北極星である。

その千葉・相馬氏が自らの鼻祖と仰ぐ平将門も、下総の国の官牧大結馬牧や長洲馬牧などを管理していたらしい（同 六七頁）。こうした背景を総括して上原は、彼等が「宇宙の信仰を持つ」ており、「馬を扱うということ」は、天体を扱うということである。同時に、運命を扱うということなのである（『かぶき十話』一〇三頁）と言う。花園院の歌に話を戻すと、馬は天上界の消息をもたらす。あるいは、霊的な風景をもたらす。

それは日本人にとって、既視感を催すような懐かしい風景であり、そこに帰ること、人間存在は、むしろ安心立命されたものではなかったか。だから「昔見し」と詠ずるのだし、逆に、「昔見し」風景から遠ざかっているという疎外感、自分のいのちが落ち着くところを喪失

る。夢は現実に移りを添える最高の塗料なのである。

山や聖所から夢が与えられるという感覚を伴って、単なる環境が、みずみずしい、生きた風景となる。悪夢を見て現実のすべてがどす黒く見えるのも、同じ原理である。

夢のフィルターを通して、私達の住まう境界領域が生命力を帯びてくる。夢を見ないという人も、何かに「夢中になる」という言い方に違和感を示さない。心底惚れ込んだ、本来の、と思える仕事に取り組んだり、「この人しかいない」と錯覚、いや確信する人に出会ったときなどに使う。初めてなのに、「昔見し」のイメージ世界に、意識が捕らわれてしまうのである。

極めて個人的、主観的な判断のように見えて、実は個人の経験を越えたものを求めているのである。自分の感覚であり、しかも、個体としての小さな枠組みだけの感覚ではなく、もっと深い自己、普遍的というか、むしろ「宇宙の意思と一つに結ばれているところの自分」の感覚ではないだろうか。いわば宇宙の思いを写し取るうと、心に曼陀羅を描いてきたのだ。それが「うつし身」としての日本人の知性ではなかったか。

宇宙意思の顕れとしての世界に邂逅すること。邂逅に、いのちの根源への帰還を思わせられること。夢の風景はその様に、私達の暮らしを立てている。